

惻隠の情

古来、日本人の心の奥底には、他人の死を悼む、習わしがある。TV ドラマでも、如何に憎んでいても、亡くなれば「仏」である。必ず、相手が仮に反社会的存在であっても両手をあわせ、祈りを捧げてから司法解剖を行う。

清水次郎長は、単なるやくざにすぎないが、今でも慕われている部分があるのは、明治維新のための戦争に際し、「東軍も西軍もない、死んだら仏様だ、」と反対の声を振り切り、敵味方なく丁重に死者たちを葬ったことにある。

今、社会党支持者は、1%未満。こんなもん、政党としては認められない。誤差範囲である。計算に入れる必要などない。いつときは、浅沼稻次郎さんらが活躍していた時代だが、自民党の半数近くの党员・議員を輩出していた。・・・社会党の凋落のきっかけは、9・11で、日本人の優秀な人材が30人も亡くなった。ところが、アメリカのWTC(世界貿易センター)のビルだから、反アメリカの連中は、「ざまあみろ」と思っている、と書いた小娘がいた。・・・被害者はすべてアメリカ人と思いついでいる。よくまあ、こんなことを書くなあ。だから、こんな程度のイデオロギーに毒された小娘が、代表になる。被害者が可哀想とは思わなかったのか。イデオロギーのためには、警官であろうと消防隊士であろうと、一般人であろうと、死んでも平気な連中が、政治屋を名乗る。民主党にも山ほどいた。社会党は、そのころから土井たか子のような他人を思いやる心のない連中がたむろしていた党だから、消滅は時間の問題だった。単なる引き金にすぎなかったが、日本中から嫌われた。

元総理の安倍晋三さんが、わけもわからず、射殺された。奈良県警の油断で、本部長は、天下りすることなく、引責辞任した。なんのためのSPか、本人たちが自覚していなかっただけのことである。

で、「国葬」をする。反対の理由が、税金を使うからだって。・・・税金をつかうから国葬という。安倍家が葬儀するなら、国葬でもなんでもない。・・・すると中曽根さんなどは、なぜ国葬にしないか、という。バカな!「国賊」ではないか。まったくもって国葬には当たらない。靖國神社の参拝で、中国にイチャモンつけさせた張本人だからである。こういうのを国葬にしたら、ほぼ歴代の総理が国葬になる。

話は、さらに変わる。小生と同じ病院にいろんな医師がいたが、嫌いな医者があった。何人もいたが、その中の一人は「アホのくせに……」と軽蔑していた。看護学院の生徒がいう、「クンクンばかりゆうて鼻鳴らして、何をゆうてんのか、いっこともわかれへん。……先生、知ってはる？」……ウン。よう知ってるで。……同じ科の若い医師の言う、「あんなもん、フン！」実は驚いた。その医師はおとなしい、小生のように悪口を言ったりしたりするような子ではない、と思っていたから。余程に、上にへつらい、下に偉そうにする典型的なタイプだったかららしい。患者の主治医になっても、患者はともかく、まわりはハラハラしていたらしい。

この男に息子がいた。診察台も買い、あとは開業するばかりの状態の歯科医さんだったらしい。この息子さんが、父親の定年退職の日、自殺してしまった。すると、上層部から「昨日まで部長でいた方だから、みんな葬儀に参列せよ」というお触れがでた。……上層部も狂っている。普段からみんなに良くしていたら、そんなお触れを出さなくても、みんな、気の毒に思って参列しただろう。

細かい事情は知るべくもないが、大体のところは、同じような推論がなされていた。……つまり、「医学部にはいれなかった」ことをことあるごとにちびりちびり、いやがらせをしていたのだらうと思う。……アホか！歯科医が、どれほど儲けているか知らないのか？医者なんか、余程に悪いことをしなければ足元にもおよばない。……バブルのころ、友人の歯科医が、一説に3億の借金があったのを、わずか3年で返済したという。……それを、ネチネチと箸の上げ下ろしのように言われたら、息子さんもたまったものではないだろう。母親は何をしていたのだらう？ 仮にこの息子さんが、母子そろって自分より成績の悪い子を小馬鹿にしていたとしても、自ら命を絶つのは、余程のことがあったのだらう。

父親なんかどうでもいいが、自ら命を絶った息子さんの無念を思うとき、胸が熱くなるのである。大学に入学してから20年近く。じっと耐えて、この日を待ち続けたのだらう。なぜ独立しなかったのだらう？

「惻隱の情」は、「卑怯を憎む心」などととともに、数学者藤原正彦さんの好きな言葉である。今や、数学者としては大したことはないが、文筆家として、ご尊父の新田次郎氏と覇を競っている。博学多才の方で、今やそちらの方が有名になってしまった。「惻隱の情」を是非辞書で引いてもらいたい。

川柳にしても、歴史に残るものは数多くあるが、小生個人は、昭和初期の「政

治屋に内閣というおもちゃ箱」とか、戦後の「これ伊藤、ご苦労じゃがと太子様」などが好みである。言わず語らずに、さり気なく風刺が利いていて、思わずニヤリとするものである。

朝日新聞の川柳の投稿記事がある。安倍晋三さんが亡くなられた翌日、隠し言葉もなにもない、ただの素の表現ばかりで、しかも、「ざまあみろ」的な表現だらけで、新聞のみならず、読者がこういう新聞をつくってきた、と思わざるを得ない。「川柳」と呼ぶのも恥ずかしい。5・7・5の散文ではないか。さすがに朝日内部で存続するかどうか話題になったらしい。読んでいて砂をかむような不快さが残った。朝日の読者は、こんな程度の連中ばかりなのだろうか。戦前、戦後すぐ、マッカーサーに脅されて転向した朝日らしい姿勢だ。今後はどちらを向いて動いていくのだろう。鵜の目鷹の目で模索している途中らしい。読者も一緒になってさがしている。

2022.11.15.